

自覺に於ける直觀と反省 (承前)

西田幾多郎

三十七

前節に於て述べた様に、生物の神経系統といふ如き純物質的なものから、如何にして意識現象を生ずるかは、到底説明はできぬ。意識内より生立して見れば、脳とか感官とかいふ如きものも、意識現象の一部たるに過ぎない、單に或一種の意識現象と共に、或一種の意識現象が生滅するといふまでである。それでは我々の身體特に神経系統といふ如きものが、意識現象と特別の關係ある様に考へられるのは、何に由るのであるか。

或一定の方向と速力とを以て動いて居る球が同一の質量を有する球に衝突すれば、前者は静止して後者が略、前者と同一の方向と速力とを以て動いて行く、此の如き場合我々は前者の運動の力が後に移つたのであると考へる。方向も速力も互に相異つた二つの力が一つの質點に働いた時、その質點は誰も知る如く二つの力を以て

作れる平行四邊形の對角線の方向に進んで行く、此の如き場合我々は二つの力が結合して一つの力となつたものと考へる。右と同様の考方に依つて、直覺的には全く異なつた現象ではあるが、熱が運動に變し、運動が熱に變すると考へられる。又此等の場合の如く嚴密ではないとしても、燐が四十四度で熔けると云へば四十四度の熱が燐を熔かしたのであると考へる。無論今日の自然科学者は現象の背後に、別に力といふ如きものがあるとは考へないであらう。キルヒホッフが力學は運動の記載であると云つた様に、すべての自然科学は經驗的事實の記載 *Beschreibung* であると考へられ、因果關係といふことは兩種の現象の變化の間に於ける函數的關係と考へられるであらう。自然科学的法則といふのは、要するに、或一種の現象の生滅變化と他の一種の現象の生滅變化との間に、一定不變の關係があるといふに過ぎない。併し之と同様の考方に依つて、腦とか感官とかいふものを種々なる精神現象の原因と考へることができらうか。右の如き因果關係の考へ方には、先づ我々の感覺的經驗といふものが與へられ、而もこれが對象として投射せられねばならぬ。然るに普通の考へ方では、感覺的經驗は感官といふものが出來て、はじめて感覺的經驗なるものが可能なるのである。我々の感官は、一方に於て感覺的經驗として現はるべきも

のなると共に、一方に於て感覺的經驗の成立條件であると云はねばならぬ、即ち二様の意味を有することとなる。第一の意味に於ては、感官は他の物體現象と同一であつて、その因果關係も他と同様に考へねばならぬのであるが、第二の意味に於ては、感官は他の物體と異なつた特殊の位置を有することとなる。例へば二種の光學的現象の間に不變的關係があれば、我々はこの二つの現象間に物理學的因果關係があると考へることができ、併し此の如き關係を有する光覺的經驗を成立せしむるものは感官でなければならぬ。すべて關係の成立には之を成立せしむるものが外になければならぬ、然るに感官は一方に於て關係の中に考へられると共に、一方に於て關係其物成立せしむるものと考へられる、此處に心身關係の不可解なる矛盾があると云はねばならぬ。

自然科學的考方から出立して見れば、我々の感官が色々な感覺的經驗成立の物質的條件として考へられるには、單なる物質的結合ではなくして全體に於て目的を有つたものと考へねばならぬ、即ち合目的結合でなければならぬ、すべての有機的機能は斯くして理解せられるのである。胃の消化や、血液循環や、呼吸や、其間、化學的又は物理的現象の外、何物をも認めることはできまい、フングス *Bunge* などのいふ様に、細胞

の中に普通の化學的作用としては説明のできない力があるとしても、單なる因果律の考から見れば、唯一つの未知的自然力といふに過ぎない。我々の身體が自然物と異なつて特殊の意味を有する一つの統一即ち個體と考へられるのは、目的概念の統一に依るのである。現象を個々の要素に分析して、一々の連鎖を一般的法則の下に還元する機械論の見方と、此の如き機械的因果の連鎖によつて成立する全體の上に於て一つの意味を認める目的論の見方とは、互に相異なる傾向を有つた見方である。而もこの二つの見方は十分その立場を明にするならば、互に矛盾衝突すべきものではない、或一つの大理石が藝術的作品として見られるのと、化學的實驗の材料として見られるのと、毫も衝突しない。我々の身體が精神と密接の關係を有するのは、此の如き目的論統一 teleologische Einheit と考へられた身體でなければならぬ。我が生命といふのは此の如き統一を名づけるのであつて、我々の精神生活は之に伴ふものと考へられるのである。それでは如何にして我々は此の如き目的論的統一たる身體と自己の精神生活との不可分離的結合を信ずるに至るのであらうか。余は之を我々の意志的運動に歸せねばならぬと思ふ。我々の身體と精神とを結合するものは意志的行爲である、心身相關の祕鑰を探ぐるのは我々の意志の深い分析に依らねばな

らぬと思ふ。若し我々に意志的行爲の意識がなかつたならば、自分の身體も他の自然物も同一と見られるであらう、特に自分の身體と精神とが密接の關係を有つと考へらるべき理由はないのである。

我々は普通に純知識的立場に立ち、自分の身體を他の自然物と同一に見ても、感覺とか思惟とかいふ我々の純知識的作用と、自己の身體といふ一自然物との間に、特殊の關係あることを認めねばならぬと考へて居る。前に云つた如く、素朴的に眼とか耳とかいふ感官の生滅と共に、色とか音とかいふ感覺が生滅すると考へて居る。無論、眼其物が光の感覺を生ずるのではない、之には光線といふ外界刺激がなければならぬ、四十度の熱が燐を熔かすといふ様に、光線が眼底の視紅 *Retinpurpurin* に對して何等かの化學的變化を起さねばならぬ。この化學的現象に我々の光覺が伴ふと考へられるのであるが、如何にして此の如き自然科学的現象に「我」の精神作用が結合すると考へ得るであらうか。感覺と感官とを結合するには、我々は自然科学的實在の見方を變更せねばならぬ、生理的機能を有つたものを一つの實在として見なければならぬ、即ち機能的統一 *funktionale Einheit* といふものが考へられねばならぬ。我々の手とか足とかいふものが單なる物理及び化學的實在ではなくして、一つの意味を有つた

ものと見られるのは、身體に於て或一部の機能を有すものとして、然か考へられるのである。光總が視紅に化學的變化を起し、この刺戟が視神經を刺戟して、光の感覺を生ずるといふが、視紅は無論光覺の成立に欠くべからざる要件であらう、併し視紅だけで光覺が生ずるのではない、全身體特に神經中樞との結合に於て此作用を有すると考へねばならぬ。我々の身體は一つの靜的統一ではなくして動的統一である、且つ單に機械的統一ではなくして目的論的統一である。無機物と有機物との相違はその質料にあるのではなく、結合の形式にあるのである、 $(\frac{a}{b})$ と $(\frac{c}{d})$ と違ふ様に函數的統一の差異である。我々の精神は目的論的函數的統一と見るべき身體と結合し、この結合に基いて眼が光線を感じると考へられるのである。我々の形體は少しも變せなくとも、生命の統一がなかつたならば、眼が光を視るといふことはなく、耳が音を聴くといふ如きこともないのである。それでは、この生命の統一とは如何なるものであるか、物體の統一と如何なる點に於て異なつて居るであらうか。我々は普通に生物的現象を現はすものを生きて居るといふ、併し嚴密に考へれば、所謂生物的現象は物體的現象より高次的のものではない、物理現象と同じく自然現象である、純粹對象の世界である。生命の現象には必ずしも精神現象を伴ふとは考へられな

い、フエヒネルの植物的精神といふ如きことは一種の比論に過ぎない、事實上或生命現象に精神現象が伴ふといふことが確かめられて、眼が光を視、耳が音を聴くと考へられるのである。それでは、斯くの如く生命といふ客觀的現象と精神といふ主觀的現象とを結合するものは何であるか。すべて二つのものを結合するには、この兩者に共通なものがなければならぬ、即ち主觀と客觀とを結合するものがなければならぬ、而してこの結合を我々の内に證するものは意志的行爲である、尙一層深く考へれば自覺の意識と云つてよからう。我々はこの結合を投射して精神と身體との結合を考へ、之を類推して生物の或部分を生きて居ると考へるのである。

我々が我々の肉體に結合して考へる「我」の精神とは、對象化せられた精神である。

々々我々の精神を身體に結合して考へる前に、先づ自分の意識を反省し、之を時間、空間、因果律に依つて組織せられた自然界へ投射して見なければならぬ。此の如き意味に於ける自己が心理學者の所謂心理的自己である。ヴントは之を我々の意志とか注意とかに伴ふ能働の感情 *Tätigkeitsgefühl* 即ち統覺作用の感情と考へて居る、ジエームスの所謂烙印の如きも之を意味するものであらう。心理學者は此の如き感情を核として、之に身體の感覺や表象を結合するのである。それでは、この統覺作用

とは如何なるものであるか。之を内省的に、即ち直接に見れば、意識内容其物の内面的發展である、即ち意識の根本的事實であつて、他に依つて説明することはできぬ。一層深く考へれば、こゝは實在の根本的形式たる自覺的體系の意識である、我々の統覺とは實在の自發自展の相をいふのである。自分の意識内容といふも、特に「私」といふべきものはない、意識せられた内容はすべて一般的である、唯、或意識内容の發展作用に伴ふ意識を自己と名づけられるのである。

我々は如何にして右の如き心理的自己を純物質界に結合して、我々の身體といふものを考へるのであるか。我々の心理的自己の背後には論理的自我がある、即ち先驗的自我がある、物質界を構成するものはこの自我である、自然界はその對象として現はれ來るのである。我々が知識によつて外界を知り、意志によつて自己を外界に實現すると信ずるのは、我々の背後にこの一般的自我あるが爲である、我々はこの背後の自我を通して、自然界と結合するのである。我々は純粹經驗の世界から自己の意志に従ふものを切り抜いて自己の身體といふものを考へる、斯く見れば意志が自己の身體を作るのがあるか、又一方から見れば自己といふ一つの中心ができるのは身體がある爲であるとも考へられる。余が手を伸し出した時、内から見れば意志で

あるが、外から見れば身體の運動である、意志は精神界の身體であり、身體は物質界の意志である、我々の身體は心と物との合一として一つの藝術品である。フィードレルが言語が思惟進行の最後の發展として表現であり、藝術は視覚進行の最後の發展としてその表視であるといふ如き意味に於て、身體は意志の表現である、心身を結合しするものは内面的創造作用である。我々が外物を知るといふのは自己の經驗を一般的自我の立場に立つて見ることである、一方から見れば自己の經驗を一般化することであつて、一方から見れば一般的なもの、己自身を實現するのである。右の如く背後の一般的自我に依つて統一するといふことは、種々の自覺的體系の中心を一つに結合するといふことである、種々の圓錐曲線が極限概念に依つて一つの公式に統一せられるといふ如き結合と考へることが出来る。例へば、我々が圓に就て考へる時、圓自體或は圓の純粹意識といふ如きものが主體として働いて居るのである。此場合、それは一つの自覺的體系であるが、翻つて二次方程式の曲線の公式から見れば、圓とか橢圓とかいふるのは、特殊な場合として、その個性を失ふ様になるのである。個々の主體を個人的意識の立場と見れば、一般的公式の立場は物質觀の立場と見ることが出来るであらう。嘗て幾何學のアプリオリを論じた場合に云つた様に、自覺的體

系は質的と量的との兩方面に發展し、射影幾何學の對象はその質的關係のみを表はすものであり、解析幾何學の對象は此の如き自覺的體系の具體的全體を表はすものであると云ふ様に考へて見れば、各自の個人的意識の區別は幾何的次元の區別に相當し、物質界とは單なる數の體系に相當すると考へることが出来る。物質界が單に假言的な、可能的な世界と考へられるのは之に依るのであらう。精神と物體との結合は解析幾何の對象に於て數と幾何學的基本との結合と同一の理に基くものと考へることが出来る、その統一は反省的自己其物にあるのである。「甲は甲である」といふ自同律の判斷に於て、主語「甲」と客語「甲」とを結合するものは動的統一である、この兩者が結合せねばならぬのは、この動的統一を假定して成立して居る故である。意識上の現象としては主語「甲」と客語「甲」とは異なつた表象であるが、對象に於ては一である、要するに抽象的には表象、對象、動的統一の三つのものは別々に考へられるであらうが、具體的には一つの自覺的體系でなければならぬ、この三つのものは即ち一である、意味は判斷を豫想し、判斷は意味を豫想するのである。唯、意味即事實、事實即意味といふ様に無限に發展する一つの自覺的體系に於て、對象の系列と作用の系列とが離して考へられ、對象の系列の方に於て、一々の對象を個々の物と見ることもできる

が、之を一つの客觀的自己的發現として見た時、この客觀的自己是個々の對象の系列に對して目的論的統一 teleologische Einheit となる、之に反し作用の系列の方に於て、一々の作用は個々の精神現象であるが、此等の系列を統一したものが一つの意識統一即ち一個人の意識となる。對象の方に於ての目的論的統一は作用の方に於ての意識の統一に相當し、此處に精神と物體との合一が成立するのである、即ち心身の結合は自覺的體系の中に於て成立するのである。意味は作用を假定し、作用は意味を假定し、創造的動作 *Erfindung* に於て兩者の統一がある様に、目的論統一たる身體は意識統一たる精神を假定し、後者はまた前者を假定するのである。兩者の統一は意志に於ての如く、又その極致は藝術に於ての如く、宗教に於ての如く、自覺的發展にあるのである。單に對象的關係に依つて考へて見ても、一つの球が他の球に突き當つて他の球を動かした時、前者が後者に働いたといふが、此の如き作用は一方が一方に働くだけではなく、相互作用 *Wechselwirkung* でなければならぬ。我々はその背後に此等の關係を成立せしめる機械力といふ如きものを考へ、此等の變化をその現象として考へる。之に反し生物の衝動 *Trieb* に於て見る様に、種々の變化が全體として一つの統一、即ち一つの目的を有すると考へられた時、我々は又その背後に生活力 *Lebenskraft*

raft と云ふものを考へ、此等の變化をその働きより起るものと考へる。連續的變化の一々の連鎖は機械的因果律によるとするも、之を一定の順序に統一して働かすものが所謂生活力である。若しロツツェの云ふ如く相互作用を成立せしめる物の統一 Einheit der Dinge 即ち自働的なものが實在であるとすれば、生活力は機械力よりも一層實在的であると云はねばならぬ。併し有機體はロツツェの物の統一といふ意味に於て未だ眞の實在ではない、眞の實在は自覺的なものでなければならぬ。而して物を働かしめる眞の力がその目的であるとするならば、精神と物體との關係は普通考へられる如き平行論的結合でなくして、目的論的結合でなければならぬ。具體的全體が抽象的なものゝ目的といふ意味に於て、精神は物體の目的であると考へねばならぬ。

三十八

余は前節の終に於て心身の結合を自覺的體系の統一に求め、且つ兩者の關係を手段と目的との關係として、目的論的に考へようとした。物質の目的は有機的生命であり、有機的生命の目的は精神である、目的が物の本質であつて、眼は光を見るために

存在し、且つその實在性を有すると云ふことができる。余は今少しく精細に此等の點を考へて見ようと思ふ。

それ自身に於て獨立な眞實在は自覺的でなければならぬ、自覺的なものが眞に具體的である。ロツツの如き考へ方に依つて見るも、眞に自己の中に相互作用を成立せしめる絶對者は自覺的でなければならぬ、實在は自覺的ならんことを要求する、即ち物體は精神を要求するのである。イならばロ、ハならばニ、といふ如き自然法は單に可能性を表す假言的命題に過ぎない、此の如き法則の結合から成立つた一つの體系が所謂物體界である。併し物體界も獨立の實在として考へられるには、それ自身に發展の動機と方向とを有し、變化が變化を生む一つの自覺的體系と考へられねばならぬ。この體系の中心となるものが客觀的には物力と考へられ、主觀的には思惟の統一と考へられるのである。物體界も、それ自身の方向を有する一體系としては、一つの目的を有し、その實在性はこの目的論的統一に依ると考へることができ、唯その目的は物質其物に對して偶然的である、現在或方向に向つて進みつゝある物體界の變化をば反對の方向に向つて進むと考へても、物質其物の性質と何等の矛盾を起さない。此點に於て物質界は實在として尙不定的であり、不完全であると考へねば

ならぬ。物體界の實在性は唯直接の具體的經驗との結合に於てのみ得られるのである。物理的世界觀は單に抽象的であつて、之を以て具體的實在を現はすことのできないのは、それが直にアンチノミーに陥るに依つて見ても明である。空間、時間、因果が單に無限であつて、終極のないといふことは、實在としてそれ自身に不完全といふことを意味して居る、然らばとて之を有限と考へることも亦それ自身に矛盾せざるを得ないのである。此の如きアンチノミーを脱するには、無限の眞の意義は自己の中に自己を寫すといふこと、即ち自覺的といふことであつて、物體界の據つて立つ所の眞實在は自覺的即ち精神的であると考へねばならぬ。所謂空間、時間、因果の形式に依つて成れる物體界といふ如きものは、それ自身に獨立な眞實在ではない、具體的實在の抽象的一面に過ぎない。此意味に於て空間、時間、因果は現象的である、表象されたもの *das Vorgestellte* に過ぎない、眞實在は表象するもの *das vorstellende* である、眞實在としての空間は表象主觀が己自身を表象する作用でなければならぬ。ロツツ^エの考の如く空間性 *Räumlichkeit* は外物の性質としては現象的であるが、内界の事實として^エは實在的と考へられるのは之に依るのである。空間は主觀に於てその實在性を有するのである、空間は物の模寫の形式ではない、物と共に流動的實在の一部を成

すのである。例へば、言語と思想とは普通に前者は後者の符徴と考へられるのであるが、フイールドレルの考の様に、兩者共に一つの内的生活の一部であつて、言語は思想の最後の階段であると考へられるのと同様の關係である。

物質界とか物力とかいふものが、それ自身の中に限定せる方向を有せざる時は、眞實在として考へることは出来ない、眞の實在は限定せられたのでなければならぬ、單に可能なるものは眞實在ではない。我々は普通に、物體界を動かすことのできない一つの實在として考へるのも、其實は暗に物體界がそれ自身に一定の方向を有すると考へるが故である。此故に物質の實在性はその目的に依るといふことができる、目的論的統一が物質界をして一實在と考へしめるといふことができる。勿論、物體界はそれ自身に完全なる一體系であつて、結合せられた力はその合成力の方向に働く如くにすべての出來事は、嘗てラプラスの考へた如く數學的必然を以て説明することができると考へる人もあるであらう。併し此の如き必然は、與へられたる或配置より起る必然に過ぎない、この配置其物は物質界に對して偶然的である、物質の内的性質と何等の關係もない。有機體では之に反しその秩序原理 *Ordnungsprinzip*、それ自身が實在である、機械的因果の連鎖は之が手段たるに過ぎない。實在は己自

身を限定するものとすれば、有機體は物質よりも一層完全なる實在といはねばならぬ。物質界を與へられた實在の如くに信ずる人には、有機體の秩序といふ如きものは偶然的とも考へられるであらう。併し物質界といふのは實在の一解釋に過ぎない、物質界が實在と信ぜられるのは、單にそれ自身に矛盾なき體系といふにあらずして、現實の經驗に基くからである。而して現實の經驗が爾く實在性を與へるのは、我々は普通に現實の經驗を限定の極致と考へて居る故である。我々の實在の考は現實の核心にかゝつて居る、現實は單なる點ではなくして、重力の中心點の如きものである。過去は、我の記憶に屬し、未來は我の豫想に過ぎない、我と實在とは唯現在に於てのみ接觸して居るのである、我は現在に於てのみ我を没してそれ自身に獨立な實在に接觸することができるのである。併し之を逆に云へば、實在が我に接觸する所が現在である、我が我を没し實在其物となつた所、即ち實在が絶對活動の状態にある所が現在である、現在は實在の重心點である。フイテの云ふ様に、我々の自覺に於ては知るものと知られるものと一である、自覺は即ち知的直觀である、而して自己が自己を知るといふことは自己が働くことであつて、眞の自覺は絶對活動であるとすれば、此の如き自覺の點が即ち現在である、現在が實在の核心と考へられるのは之が爲で

ある。

現在の出來事が單に一般的法則の特殊なる一例として考へられる物質界には、嚴密の意味に於て現在といふものが無い。現在は限定の極致である、唯一無二の點でなければならぬ。物質界に於ける現在の限定は、その與へられた配置によるのであるが、此配置は物質其物には偶然である、或配置の唯一と考へられるのは、現在の經驗が核心となつて居る故に過ぎない。生物學的現象では、之に反し、その範圍内に於て唯一の點即ち現在といふものを考へることができるのである。勿論、一方から見れば、如何なる體系でも限定の方面の備はらないものはない、向にも云つた如く、純粹思惟の體系に於てすら、限定の方向といふものを考へることができ得であらう。併しまた一方から考へれば、所謂物質界といへども、嘗ても喩へた如く、立體の平面圖の如きものである、射影圖は原立體に關係して意味を有する如く、物質界は原實在との關係に於てその意味を有するのである。原立體の各頂點と平面圖に於ける相應點とを結合したものが物體界の合目的關係を示すものである、之を精神と身體との結合を示す線と云つてもよからう。若し原立體が靜止せるものではなくして、一定の方向に向つて動くものとすれば、之に依つて物體界に於ける變化の方向も定つて

來る、而して物體界に於て動かすべからざる現在といふものを考へるとができるのである。右の例を尙一層敷衍して考へて見れば、その立體の各面は各々一つの心理的個人に相當し、各面の各邊は種々の精神作用の區別に相當すると考へるともできる、而して原立體と射影面とを結合する線は、一方から見れば心理作用を表はし、一方から見れば生理作用を表はす、即ち精神物理的平行の現象を表すものと見るとができるであらう。若し此平面圖を立體との關係から離してそれ自身に考へるならば、此等の線や面の射影も單に平面上に於ける線や形の關係と見るの外はなく、即ち唯物論者の説の如く、すべての現象が物理的關係によつて説明せられることとなるのである。併し射影圖は元、原立體との關係に於てのみ其存在理由を有するのである、射影圖は原立體を或一方面から現す手段に過ぎないのである。物質界が以上述べた如く立體の射影面の如きものであるとすれば、生物界の現象といふ如き合目的現象は射影面に原立體との結合線を加へたものである。自然界に於ける目的觀といふのは物質現象を具體的なる原經驗との關係に於て見たものである。目的觀の基となるものは、我々の意志作用であつて、意志の影を物質界に映して見たものが生命である。因果關係が「イがあらばロが、従はねばならぬ」といふに對して、目的的關係

が「口がある爲には、イが先立たねばならぬ」といふことであるとするれば、前者を翻へす力は前者の外になければならぬ、物力が平面的とすれば、生命は立體的である。生機論者 Vitalists は物力から生命は出ないといふが、物力といひ生命といひ、別にかゝる力があるのではない、皆實在の種々なる見方に過ぎない、唯目的觀は機械觀に比して此實在に近い見方といふことができるのである。生物の生命に於て現在といふのは自覺的體系が己自身を限定し行く發展の尖端に當るのである、即ちエラン、ヴェイタールの尖端に當るのである。生命は、翻すことのできない順序を、己自身の中に藏するものとして、唯一無二の現在を有し得るのである。生物の生命も、繰り返し得る一つの完結した統一と考へれば、一つの結合した物力の體系と異なる所はない。生命の生命たる所は無限なる實在の流に接觸する所にあるのである。無限なる自覺に接觸し、その面影を映する所にあるのである。目的論的因果關係に於ける終局原因 *Finale* use *Finale* は一つの物體面と自覺的體系との接觸點を示すものである、即ち後者の立場から前者を見たものである。すべて我々の對象界は、その中に没入して働くことはできるが反省することのできない直接の流動的實在に接觸することに依つて、それ自身が流動的となり、無限なる大生命、大實在の一部となることができるのである。

向に空間は内界の事實として實在的であると云つたのも之に依るのである。勿論以上述べた如く目的觀が機械觀よりも一層具體的實在を現すといふも、直に所謂生物の生命といふ如きものが物理的力よりも實在的であると考へるのではない。所謂生物の生命といふものは物力よりも弱いものと考へねばならぬ、物力は不滅であるが生物の生命には死といふものがある。ロッセロッセの“Grundzüge der Metaphysik”に於て生命と自然との關係を論じて、或一つの衝動が全然自分自身にてその目的を達することができれば兎に角、さなくば既に與へられたものを手段として用ゐねばならぬ、此場合衝動がその目的を達するには、手段其物の法則に従はねばならぬ、従つてその力は有限であると云はねばならぬ、一つの體系が外界の影響に對して合目的の反動を爲し得る間は、生きて居るといふことができるが、その程度を越えれば、最早かゝる反動をなすことはできぬ、即ち死であると云つて居る。併し生物の生命といふのは經驗の一部分の目的觀である、實在の一部分の具體的見力に過ぎない。物力の破ることのできない、否物力をその一面として含める、ロッセロッセの所謂自分自身にて目的を達し得るものは、自然全體の生命でなければならぬ、宇宙進化の目的力でなければならぬ。我々の個人的經驗の範圍内に於ては、我々の自己が實在の中心であつて、我々の

身體はその射影たる我の生命を中心として働いて居ると考へることもできるが、我の「我」はロッツェの所謂永遠の泉より流れ出づる間歌的旋律 *eine Melodie mit Pausen* に過ぎない、従つて大なる人格的統一の一面たる自然力に對しては、個人的生命は葦の如く弱きものと云ふこともできるのである。

物質界に比して生命の世界は一層具體的實在に近づけるものといふべく、生命の世界に比しては所謂意識の世界は更に一層實在在物に接觸して居ると考へることが出来る。元來此等の世界は各自獨立の實在ではなく、一つの實在を色々の立場から見たものではあるが、今假に、普通に考へられる如く、此等の世界を各自獨立の世界と考へて見れば、此等の世界は「現在」の一點に於て相接觸して居ると云ふことができ。現在は種々なる對象界の接觸點である。我々は往々、現在といふことを無限なる時の流の一點の如きものと見て、線は點の連續であると考へる如くに、時は現在の連續であるかの様に考へるのであるが、連續は分離的な點の連結と見ることができない様に、時は孤立的な現在の連結ではない。眞の現在は時とふ連續の切斷 *Stoßlinie* でなければならぬ、即ち現在といふ一點の中に全體の意味を具して居らねばならぬ。而も現在は單に可能的な直線の任意の一點といふ如きものではなくて、質的に限定

せられたものでなければならぬ質的連續の切斷でなければならぬ、此處に「現在」といふことの唯一無二なる意味があると思ふ。向に云つた様に自覺的體系は量的と質的との兩方面を具へて居るとすれば、現在はこの兩方面から限定せられたものでなければならぬ、即ち現在ければならぬ、自覺的體系の全體から限定せられたものでなければならぬ、即ち現在は實在の全體が反射せられる焦點とも云ふべきである。我々は現在に於て宇宙の核と接するのである、前にも云つた如く現在は實在の重心の如きものである、重力は物體の何れの部分にも具つて居るが、すべての力が重心の一點に於て働くものと考へられてよいのである。物體の重心は物質の配置といふ如き單に量的な關係から定まるのであるが、實在の現在は種々なる經驗の體系即ち種々なる世界の質的關係によつて定つてくるのである。種々なる世界がそれぞれのアプリオリの上に立つものとすれば、現在は此等のアプリオリの統一の中心、即ち自覺的體系の幾何學的關係の重心とも云ふべきであらう、即ちベルグソンの所謂エラン、ヴィタタールの尖端である。斯くして現在は、自覺的發展たる直接經驗全體の重心と考へるとができる、此處に動かすことのできない現在の絶對性がある、所謂物體の重心といふ如き相對的のもの、絶對的に動かすことのできない現在との區別も此處にあるのである。余は

理想的と實在的との區別も之に基くと思ふ、現在は、我々に對して絶對に與へられたもの、限定せられたものであつて、我々が之を反省するとはできぬと考へられるのは、それが絶對無限なる統一線上にあるが故である。自覺的なる我々の經驗體系を圓の如きものと考へて見ると、エラン・ヴィタールの線は無限の距離にその中心を有する圓の如きものであつて、現在は此直線上の一點とも考ふべきである。昔ニコラウス・クザヌスは“*De deo et ignominia*”に於て、既にこの比喻によつて有限と無限との一致を説いて居るが、すべての經驗は自覺的であつて、理想的と實在的と區別は唯その中心が有限の距離にあると無限の距離にあるとに依ると考へることができ、而して斯く經驗の無限なる統一といふことは、當爲即存在で、純粹活動といふことである、即ち創造的進化といふことでなければならぬ、何となれば無限とは自己の中に自己を寫すといふことである。是に於ては、我は我を忘し、主客合一、萬物我と一體である、知識の形式と内容との結合も此處に求むるの外はない、我々の知識の新なる内容は常にエラン・ヴィタールの尖端から入つて來る、所謂經驗的知識内容のみならず、論理より數理に移り、算術より解析に移るにも此點を通らなければならぬ。單に自然科學的知識に就て見ても、自然科學的知識が出來るだけ憶説をすて、事實に近づくに従つ

て、この現實を中心として考へる様になると思ふ。ヘルツが「力學原理の序論に於て云つて居る様に、*Kernkräfte* の力學から *Energie* の力學に至り、更に氏の力學に至つて、何等の世界觀を設けず現實其物を論ずると考へることができ、現代の相對性原理の如き最も此意味に適つたものと云ふことができるてあらう。現實を中心として考へるといふことは、原理としては極めて一般的となると共に、最も具體的な實在を考へることができるのである。或は無限の統一といふ如きものは考へることはできぬと云ふでもあらうが、無限の統一を考へるといふことはそれ自身に動的となることである。

實在の重心即ち自覺的體系の中心とは如何なるものであらうか。自覺體系の一例として推論式に就て考へて見ても、一般者が己自身を限定する過程として一つの方向といふものを考へることができ、勿論眞理自體には何等の時間的後先もないと云ひ得るであらう、併し此等の間にも *フッサールの現象的時* *phänomenologische Zeit* といふ如きものを拒むることはできまい、前者は却つて後者に基いて居るのである。而して此の如き限定の方向は何處までも進み行くことができ、*コーエン* の所謂根源の思惟 *Denken des Ursprungs* に於ての如く、何處までも元に還つて基礎附けること

ができる、實在は此の如き自覺的體系の果しなき連續である。一つの體系から他の體系に移るのは此の如き内面的轉化に依るのである、この内面的轉化の瞬間、即ち主客、一作用となり、一流動となつた時、それが眞の現在であつて、そこに全實在の絶對的統一があるのである。精神と身體との結合に就て考へて見ても、前に論じた如く、單なる物質界としては之に精神の結び付き様はない、兩者は全く沒交渉である、物體が精神と結合するには有機的とならねばならぬ、即ち目的論的とならねばならぬ。既に物體が目的論的に考へられ、一つの方向といふものが考へられた時、それは一つの中心を有たねばならぬ、この中心が自覺的體系の轉化の點であつて、此點に於て精神と身體との相結合すると考へられるのである、即ち精神の座 *Sitz der Seele* といふものが考へられるのである。我々の動作が合目的であつて、我々の身體が一つの機能的一統と考へられた時、外界刺激を受けて之に對して反動する中心、即ち知覺神經と運動神經の接觸點が精神の座と考へられるのである。斯くしてベルグソンの云ふ如く心身の結合がエラン・ヴィタールの尖端に於てあると云ふことができるのである。精神と身體との關係は普通に考へられる如き單に平行論的關係ではなく、コーエンの所謂根元の意味に於て精神は身體の根元である、精神は身體に比して一層高次的

な、具體的な立場である、身體の實在性は精神にあると云つてよいのである。若し以上のような関係を目的と手段との関係といふことができるならば、身體は精神の手段であつて、精神と身體との関係は正しく目的と手段との関係といふことができるであらう。數理が論理の具體的根元となり、連續數が分離數の具體的根元となり、生命が物質の具體的根元となると云ふ如き意味に於て、精神は身體の具體的根元となり、後者は前者の爲に存し、その手段と云ふことができるであらう。單に認識對象として抽象的に考へれば、論理は數理より獨立に、分離數は連續數から獨立に、物質は生命から獨立に考へ得るでもあらう。併し具體的には、對象と作用とは不可分離的である、作用を離れて對象を、對象を離れて作用を理解することはできぬ、論理は數理によつてその實在性を得、分離數は連續數によつてその實在性を得、物質は生命の統一によつてその實在性を得るのである。『抽象的なもの、假言的なもの、依他的なものは、それ自身に於て不完全であり、それ自身に於て矛盾を有つて居る、己自身を完全にするには高次の立場に移つて行かねばならぬ。嘗て云つた様に、大前提に於て言ひ表はされたものが蓋然的であり、理想的であり、小前提に於て言ひ表はされたものが事實的であり、現實的であつて、斷案に於て此兩者を結合した自覺的體系の全體を見るこ

とができる、即ち純粹活動たる具體的全體が現はれるのである。大語は物體界を表はし、小語は心理的主觀を表はし、精神と身體とは推論式の斷案の形に於て結び付いて居ると考へることが出来る。若し自然科學者の考へ方の様に一般的なものを実在として考へて見れば、個人的精神現象といふ如きものはその特殊なる一例に過ぎないと考へられるであらう、併し推論式の客觀性は單にその大前提の抽象的一般性にあるのではない、客觀的知識の根柢となる眞に一般的なるものは具體的一般者でなければならぬ、即ちそれ自身に創造的なものでなければならぬ、知識の客觀性は之に依つて立せられるのである。推論式の本質は單に假言的な大前提にあるのではなく、己自身を限定する具體的一般者の創造作用にあるのである。而して創造的作用の本質はその背後の原因にあらずして、その行く先の目的にあるのである、單に一般的なるものは實在の目的ではなくして、却つて發展の手段となるのである。斯くして客觀的知識發展の要求から云へば、論理は數理の發展の手段となり、分離數は連續數の發展の手段となり、物質界は精神界の發展の手段となる、此の如き意味に於て、我々の精神と身體とは推論式の形に於て、目的と手段との關係に依つて結合すると云つてよからう。若し精神の座ともいふべき兩者の接觸點を求むれば、小語が之に

當るといふことができる、小語はエラ・ヴァイタルの尖端に當つて、實在の重心となり、我々の現實に當ると考へることが出来る。物體界といふのは、それ自身に獨立せる實在ではない、具體的な眞的實在の一方面に過ぎない、實在全體の發展の上から云へば、その發展の手段と考ふべきものである。余は是に於てロツエが知識の意味を論じて、我々の感官は外界を寫す爲に存在するのではない、美しき光の輝き、妙なる音の調べ、何れもそれ自身の爲に存するのである、彼等は目的其物である、物體的運動は我々の精神をしてこの目的を達せしめる手段に過ぎないと云つた考に同意を表したいと思ふ。(未完)